

M-GTA 研究会 Newsletter no.7

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：青木信雄、岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、柴田弘子、林葉子、水戸美津子、木下康仁

第 29 回 研究会の報告

【日時】 2004 年 12 月 11 日(土) 13:00～18:00

【場所】 立教大学（池袋）10 号館 1 階 x106 教室

【参加者（敬称略）】

水戸美津子（自治医科大学）、原島博（ルーテル学院大学）、市江和子（日本赤十字豊田看護大学）、滝原香（富山医科薬科大学大学院）、大橋達子（富山医科薬科大学大学院）、長住達樹（群馬大学大学院）、鈴木直樹（埼玉大学）、文元基宝（文元歯科医院）、山川裕子（佐賀大学）、平井妙子（目白大学大学院）、松戸宏予（筑波大学大学院）、田中美知代（京都文教大学大学院）、三毛美予子（甲南女子大学）、藤丸千尋（久留米大学医学部看護学科）、大西潤子（日赤武蔵野短大看護学科）、矢吹道子（虎の門病院）、古瀬みどり（山形大学）、宇佐美千鶴（日本福祉大学大学院）、荒井昭子（名古屋市立大学病院）、塩谷久子（広島国際大学）、山崎登志子（広島国際大学）、升井恵美（専修大学大学院）、藤田みさお（東京大学大学院）、佐川佳南枝（西川病院）、林葉子（お茶の水女子大学大学院）、隅谷理子（大妻女子大学大学院）、福島哲夫（大妻女子大学）、宮坂友美（富山医科薬科大学大学院）、木下康仁（立教大学）の計 29 名

【世話人会報告】

1. 10 月 2 日に出雲市で行われた M-GTA 研究会第 4 回公開研究会の会計報告
2. 今年度の事業として、4 編の M-GTA 論文（すでに M-GTA を用いて投稿し掲載されている会員の論文）のコピーを会員に郵送した。
3. 研究会の世話人をお願いしていた富山医科薬科大学の筒口由美子先生が 11 月 12 日にご逝去されました。先生を介して入会した人も少なくなく、研究会のためにご尽力いただきました。研究会から香典を出させていただきました。
4. 次回の研究会は 3 月 12 日（立教大学の予定）。

（文責 宮坂）

【研究報告 1】

男性定年退職者が地域でのつながりと役割を再構築するプロセス

東京大学大学院医学系研究科 地域看護学分野 岩瀬裕三子

研究目的

サラリーマンは地域につながりが希薄なまま定年退職を迎えるケースが多いといわれる。特に男性では地域でのつながりが少なく、配偶者のみに頼る傾向があるとされる。よって男性定年退職者は地域でのつながりを広げそれを維持することが求められている。高齢者の人とのつながりであるソーシャルネットワークに関する研究は理論面でも実証面でもネットワークの静態的把握が中心的であった。高齢者が他者と知り合ってから関係の継続・発展を扱った研究は少ない。

一方、日本の男性高齢者は他の先進諸国と比較して就業意欲が極めて高く、ボランティア参加意欲も高いにもかかわらず、地域においてサポートの受領者として捉えられることが多く、サポートの提供者やマンパワーとして捉えた研究は極めて少ないのが現状である。定年退職者がサポートの担い手として地域で活動しながら、自らの地域でのつながりや役割を再構築することが有用であるといえる。

以上をふまえて、本研究では、地域の保健・福祉問題解決を目的とする仕事に再就業した男性定年退職者を対象とし、彼らが、どのようなプロセスを経て地域で人とのつながり、役割を獲得したかについて明らかにする。

M-GTA に適した研究であるかどうか

- ・本研究の分析焦点者は、地域の保健・福祉問題解決を目的とした仕事^{注)}に再就業した男性定年退職者である。保健・福祉、教育などの分野はヒューマンサービス領域に属するものである。本研究の知見は「研究目的」に示したような実践への還元ができると考える。
 - ・本研究で明らかにすることは現象特性に示したようなプロセス的性格をもっている。
- 以上より、本研究はM-GTAに適していると考ええる。

注) 用語の定義

保健・福祉問題解決を目的とした仕事とは小地域福祉活動として行われているような仕事である。

小地域福祉活動：高齢者や障害者等が住み慣れた地域社会で安心して生活できるように、小地域を単位として、地域住民や行政、関係機関とが協力し合って、助け合い活動や見守り活動を行うこと

現象特性

定年退職期は退職に伴ってアイデンティティが揺らぎ、問い直される時期である。

定年退職者はさまざまな社会的活動を通して地域に新たなつながりや役割を再構築していく。定年退職者が社会的活動の1つである地域での仕事に関わり、つながりや役割を獲得するまでには多くの社会的相互作用のプロセスが存在する。

分析テーマへの絞り込み

男性定年退職者が地域の保健・福祉問題解決を目的とした仕事に再就業し、地域でのつながりと役割を再構築していくプロセス

分析焦点者の設定

60 歳以上 75 歳未満の男性定年退職者。地域の保健・福祉問題解決を目的とした仕事の起業家または組織の責任者として働く者

データ収集法と範囲

対象者のリクルート法

1. 独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構と財団法人東京しごと財団に研究の趣旨を説明し、団体の紹介を依頼した。
2. 団体の長に研究の趣旨を説明し、対象者の紹介を依頼した。
3. 対象者本人に個別に連絡をとり、研究の趣旨と方法、倫理的な配慮を説明の上、同意が得られた者を対象者とした。

範囲

61 歳から 70 歳でホワイトカラーのサラリーマンをしていた男性 9 名

カテゴリー生成

28 個の概念から 12 個のカテゴリーを生成。自分がコアカテゴリーと考えるカテゴリーは 2 個

以上の説明ののち、結果図を示しながらストーリーラインの説明を行った。

質疑応答

1. 定年後、地域でのつながりを構築していくためには町内での自治会活動やボランティア活動なども考えられる。それらに参加したケースでも同じようなプロセスが見られるのではないか。あえて就業にした意味とは？

→就業を選択した対象者は現役時代の働き方で実現しえなかったこと―自ら意思決定して

2. 事業を運営していくことなど、ビジネスとして成立させていくことに意味を求めている。この点がボランティアなどの場合と異なっている。そうしてはじめた仕事から地域の人に感謝されるようになり、地域でのつながりが出来てきている。また、仕事をする中で地域での問題を発見し、新たな役割を見つけている。

3. 地域でのつながりがメインのテーマではなく、分析結果から出ているものはもっと違うものではないのか。

→研究を始めた当初、「地域でのつながり」ではなく、「仕事に求める意味」がテーマだった。つながりは「思いがけない副産物」などのカテゴリーにしていたこともある。テーマを見直したい。

4. カテゴリーの＜折り合いをつける＞というのはもっと複雑なものが含まれているのではないか。

→単にエイジズムに打ち勝とうとするだけでなく、自分自身の老いや限界などを見据えて複雑な折り合いをつけて就業につなげている。

5. 方法論的限定としては「仕事に近い活動をやっていた人」に限定したということではないか。

→YES

6. 結果図にカテゴリー名だけ記入されているが、それを導くにいたった概念名を明記すればもっと分かりやすくなるのではないか

→概念の数が多く雑然とするので、カテゴリーだけを載せた。もう少し収束化して共に載せることを検討したい。

7. 概念が定義のようなレベルであるが、もっとぎりぎりまで凝縮したものとするべきである。

→データから離れて粗い概念との指摘を受け、意識して抽象度の低い概念をつくってきた経緯がある。概念のありかたを再考し、組み直したい。

感想と展望

自分が研究をはじめた当初、明らかにしたかったことがさまざまな要因で見えなくなってきました。そのことをご指摘くださってありがとうございました。

概念のつくりかたについては、抽象度が高くて分かりづらいと指摘されたからといって、それを説明的で平板なものとしていたのではいけなかったと反省しています。

論文提出までほとんど時間がありませんが、概念の命名から見直し、ぎりぎりまでがんばってみます。どうかまたお気づきの点がございましたら、アドバイスを賜りますようお願いいたします。

【研究報告 2】

ベテラン看護師のストレス過程への影響要因と対処行動の変化

山崎登志子（広島国際大学看護学部看護学科）

I 発表要約

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

ヒューマンケア従事者に焦点を当てた研究であり、病院という特定環境の中で患者との相互作用によって生じるストレスのプロセスを説明しようとした研究であることから、M-GTA が本研究の手法として適していると考えます。また、今回の研究結果は看護師のストレスを軽減するために有効なコーピング方法を提示できる可能性があり、実践の場でその結果がさらに検証されていくものと考えます。

2. 研究目的

後期高齢化社会の到来や医療の高度化等に伴い看護師の需要が高まり、1992年に「看護婦等の人材確保促進に関する法律」が制定された。その後、看護師の処遇の改善や就業の促進、人材確保の推進がなされるとともに、看護師の就業者数は増加し、職場環境も整備されてきている。しかし、バーンアウト状態に至る者やバーンアウト予備軍である看護師の割合は依然として半数以上であるとされ、看護師の精神的健康が改善しているとは言えない現状がある。

看護師の精神的健康には、個人要因、ストレスコーピング、ソーシャルサポート、職場

環境要因が関連するとされている。個人要因の1つとして看護師経験年数があげられる。10年以上の看護師はバーンアウトに至る率が低いとされているが、その理由については未だ明らかになっていない。そこで本研究では、看護師のストレス過程を理解するために行った面接調査の中から看護師経験年数10年以上の看護師に焦点をあて、ベテラン看護師のストレス過程に影響する要因とそれらに対する対処行動が、経験年数の増加に伴い変化していくプロセスを理解する目的で分析を行う。この知見によって、看護師の精神的健康を保持増進する指針を得ることが可能と考える。

3. 現象特性

病院という環境の中で看護師は患者へのケアを行っていくが、ベテランといわれるまでの過程で様々な葛藤や疑問点を克服したり、新たな問題が生じてきたりする。

4. 分析テーマへの絞込み

ベテラン看護師のストレス過程に影響する要因およびストレスへの対処行動が経験年数増加によって変化していくプロセス。

5. データの収集法と範囲

1) データ収集法

A病院の看護部長に調査の趣旨を説明し、面接調査施行の同意を得た。その後、看護師経験が10年以上の女性看護師に個別で面接依頼を行い、面接の同意とともに面接時のテープ録音の許可が得られた13名を対象とした。

面接時期は2000年11月～2001年8月である。

2) 面接内容：半構成的面接調査

5年前のストレス状況を思いつくまま自由に述べてもらった後、こちらで用意したストレス状況を提示し、多いと感じたストレス内容について具体的に述べてもらった。次に現在のストレス状況を5年前と同様の方法で述べてもらった。

6. 分析焦点者の設定

A病院で同じ所属に6年以上勤務しており、看護師経験年数が10年以上の女性看護師。

1) 所属経験年数6年以上とした理由

5年前のストレス状況を質問した際、所属が変更になったばかりだと業務内容に不慣れなことから生じるストレスの影響が反映され、経験年数増加によるストレス状況が不明瞭になる可能性があるため。

2) A病院に限定した理由

同じ病院内にすることで職場環境のできる限りの均一化を試みた。

7. 分析ワークシートとカテゴリーの作成

17 の概念と 8 のカテゴリーを提示した。

8. 結果図

経験年数によって「医療環境」、「個人の変化」のストレス変化から「大変さからの開き直り」に移行していく過程を結果図として示した。しかし、結果図もストーリーラインも自分の中でまとまりきれていないことを報告した。

II 質疑応答要約

1. 研究目的や分析テーマが不明瞭である。

- ・ ベテラン看護師が様々なストレスを乗り越えて仕事を続けていく理由を明らかにしたいのではないか。
- ・ 年数を経っていくことで様々な変化が生じるのは当たり前なので、それらの変化を踏まえた上で、何の変化に焦点を当てるべきか目的を絞り込むことが必要ではないか。
- ・ 「対象不変認識の獲得」という概念をコーピングととらえているが、それはスキルアップしているということで、コーピングの定義からははずれるのではないか。
- ・ ストレス、コーピングという言葉にこだわりすぎている。それらの言葉を使用せずに分析テーマを見直してはどうか。
- ・ **Grounded on data** になっているか。もう一度面接記録を見直し、このデータから何が言えるかを検討してはどうか。

2. 概念生成のための類似例が少なすぎる。

- ・ 本来なら捨てられるべき概念が多いのではないか。
- ・ 面接記録をみると、面接内容が浅い感じ。質問者が話の内容を深める機会を逃している印象である。
- ・ 概念生成にあたり、理論的メモをもっと活用すべきである。それによって、概念がより洗練され、概念間の関係も理解できてくる。

III 感想と展望

今回発表の機会をいただき、ありがとうございました。

皆様のご指導により、目的と結果との整合性がとれていないことに気づき、また **Grounded on data** ではなく、いかに自分の都合にあわせてデータを解釈していたかを客観視することができました。データそのものが今回の目的に対応したものではないため、コーピングに焦点を当てるとどうしても概念があまり抽出できませんでした。このこと自体が **Grounded on data** になっていないことの表れだと感じております。

今後は、もう一度面接記録を詳細にみることで何がデータからいえるのか検討することと、分析テーマにある「ストレス過程」、「対処行動」を別の理解可能な表現にするこ

とで、研究目的と分析テーマの明確化を目指していくという2つに焦点をあて、今回のデータを活かす方法を検討していきたいと思っております。

次回の研究会までに、これらの整理ができなかった場合、今回のデータにこだわらずに、研究計画に基づき新たなデータを収集することを考えます。

この研究会の良さは様々な分野の方からのご意見がいただけることで、自分の研究の視点を客観視できることです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします

【研究報告 3】

乳がん手術を体験した患者のストレス生成プロセスに関する研究

—乳がん術後の患者の語りより—

京都文教大学大学院 臨床心理学研究科 田中美知代

1. 発表の要旨

背景： 乳がんはがんの中でも経過の長いがんである。医療機関での乳房温存術実施率の格差が大きい。患者の疾患や手術に対する捉え方が、患者の情緒障害や精神症状にも大きく影響している。また、乳房は女性性や母性性のシンボルでもあり、多くの女性にとって、乳房を失うことは、自尊心、性的能力、および、女性らしさと密接に結びつく器官を失うことを意味し (J. C. Holland, 1993)、手術による乳房の変形は、ボディイメージの変化により、患者の自己概念を障害すると示唆される。しかし、手術後の患者に対する心理療法的援助として、短期間の集団介入が試みられている程度である

研究テーマ： 乳がん手術直後の入院患者にとって、乳がんの手術はどのような体験であったのか。手術を受けることによる患者のストレスはどのように認識されていき、心理的にどのような影響を及ぼしたのかといった患者の心理特徴を、乳がん手術直後の患者の語りから捉えることにより、乳がん患者に対する心理援助について考えることが目的である。

現象特性： 乳がんであると分かった時点から、患者の周辺では、身体的にはもちろんのこと、心理的にも色々な問題が起き、それらの問題は、何らかの心理的なストレスをもたらしている。また、術後一定期間を過ぎると退院しなければならないという現実の中で、患者は常に表面的回復とは裏腹に残っていく自己イメージの傷つき・がんの再発・転移というようなさまざまな不安などに対して向き合い、対処していくことになる。医療現場では、身体的な治療・援助が中心とならざるを得ないこともあり、診断・治療過程において、患者の思いや希望を取り入れること、その時々で患者に気持ちの整理をしてもらうことが難しかったりするのが現状である

M-GTA に適した研究であるかどうか： 本研究では、乳がんであると告知・診断され、初回の手術を受けた入院患者が分析対象者である。また、限られた人数のデータから、乳

がん患者の心理的な特徴、すなわち、ストレス生成、および、対処行動のプロセスを捉え、乳がん患者に心理的な援助への示唆を与えるような理論を構築する

データの収集法と範囲： 2004年7月8日～7月29日、A県にある総合病院の混合病棟において、乳がんと診断・告知され、乳がん手術（乳房切除術および乳房温存術等）を受け、かつ、手術後1日目以降の入院患者17名に対して、研究趣旨を説明した上、同意を得られた14名の患者に対して面接を行った。面接時間は、患者が疲労しないように考慮し、30分を目処にした

分析テーマ： 乳がんであると分かった時点から、手術に至るまでの期間は、患者によってさまざまであるが、手術が終わった時点というのは、患者にとって、外的にも内的にも一段落する時期であると考え、手術直後の患者がどのようにストレス、および、その対処方法を生成していくのかというプロセスについて、そして、どのようにそのプロセスに対して対処していくかというプロセスを捉える。そして、乳がん患者に対する心理援助について考える

分析ワークシート：例として「乳がんであるという現実の受け入れ難さ」「第三者に話を聴いてもらう」を例示した

カテゴリー生成： 23概念より、3つのコアカテゴリーを生成

2. 質疑応答とコメント

- 研究テーマと結果の不一致： 結果図を見ると、乳がん患者ではなく、がん患者の一般的なストレス、コーピングの関係になっていて、乳がん患者特有の女性性の苦悩がなくなっているのではないかと → 対象の選び方と関係している。手術直後の面接であったことが影響しているのではないかと
- 乳房全摘患者と乳房温存患者を一緒に分析対象としたことについて、心理的にかなり差があると考えられ、どうなのか
- カテゴリー名「ごまかし行動」について、当事者にとって、かわいそうなネーミング → 積極的なネーミングを考慮し、変更したい
- 語ることでストレスを意識化するという点について、「語る」ということを一言で表わしているのはもったいない。どう語るのがいいのか、誰に語るのがいいのかを考えた方がよい。また、回避している人にとって、「語る」ことはどうなのかを考える
- 分析ワークシートからストーリーラインが構成されていないため、解釈に根拠がない
- 乳がん患者を対象としているのに、淡々と語られていてドロドロしたものが見えない
- ラザルスの理論に当てはめた概念になっている。経験をくみとって、プロセスの中で見えてくるように解釈した方がよいのではないかと
- 結果図の中の変化の方向で示した「無意識」→「ストレスの意識化」→「対処行動」について、この図の中で使う「無意識」の定義をした方がよいのではないかと

- ・ 結果図の中の「語る」というのは、概念なのか、概念に関係なく「語る」ということなのか
- ・ 概念の中での中心の概念は何か → 「第三者に話を聴いてもらう」→ 語ってもらったことによって得たデータからの生成した概念として、おかしいのではないか

感想

M-GTA については、どのように分析をすすめていけばよいか分からない段階からのスタートでしたが、今回の研究会では、発表の機会をいただき、皆様から貴重なご意見をいただきありがとうございました。木下先生のご著書や公開研究会に参加させていただき、M-GTA について、少しは理解できたつもりでしたが、発表をさせていただき、まだまだ理解できていなかったことばかりであったことに気づかされました。

この研究に関しては、分析テーマを考える時点に立ち返って、データに基づいた概念を導くところから、分析をやり直す必要があると感じております。また、既成の概念を当てはめたつもりではなかったのですが、ストレス、コーピングという既成の概念に当てはめていたことに気づかされました。そして、M-GTA では、データ収集に入る前の研究構想の段階がいかに大事であるかということがわかりました。今回、発表させていただいたことで、多くの気づきを得られ、本当に勉強になりました。ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

~~~~~

#### 【構想発表1】

##### 体育における運動の意味生成過程に関する研究

鈴木直樹（埼玉大学教育学部）

#### I 本題

##### 1. 研究テーマ

鈴木（2003）は、体育授業におけるコミュニケーションに学習評価が内在されているという立場に立ち、「学習評価としてのコミュニケーション」という概念を提示するとともに、評価を「価値判断」から「意味解釈」へと転換させた考え方を示唆した。この「学習評価としてのコミュニケーション」を明らかにする上で、「意味解釈」の手がかりとなる運動の意味を明らかにする必要がある、また、その生成プロセスを明らかにすることによって教師は授業づくりにおいて大きな示唆を得られると考える。そこで、本研究では、子どもたちが授業で運動の意味を生成する過程を明らかにすることが目的である。

##### 2. 現象特性

体育授業において、「自己－他者－モノ」との「かかわり合い」の中で、運動の意味生成していくことを学習ととらえて授業実践を行う。その中で、教師と子どもたちが協働しあい、相互作用することによって生成される学習について考えていく。

(本人の認識や感情の動きなどのように直接見えにくい変化)

### 3 M-GTA に適した研究であるかどうか：

本研究で対象とする体育授業は教育学領域に関する研究であり、教育という営みにおける社会的相互作用に関わる研究である。また、実践に基づいたグラウンデッド・セオリーを導くことで、関係論的な学習観に立った授業展開の実践上の手がかりを提示することができる。このようなことから、本研究の成果は、体育科の究極目標である、運動を生活に取り込み、「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」授業実践に向けて具体的な手がかりになると考えられる。

### 4 分析テーマへの絞込み

- ①明らかにしたいプロセス：授業における教師と子ども間の関係性の変容において、学習として現象化される行為を意味づける運動への意識が「運動の意味」として生成され、変化していくプロセス。
- ②分析テーマ： 「体育における関係性の変容に伴う運動の意味生成プロセス」
- ③焦点化するもの：
  - ・ 「自己－他者－モノ」との「かかわり合い」の変化プロセス
  - ・ 「運動の意味」を生成し、運動をすることへ高い意欲を持った子どもとそれを支援した教師との相互作用プロセス。
  - ・ 「運動の意味」を生成し、運動をすることへ高い意欲を持った子どもとそれを支援した子どもたちとの相互作用プロセス。

### 5 データの収集法と範囲

- ① 対象： N 小学校 2 年生児童男女 19 名・授業者
- ② 調査期間：平成 16 年 10 月～平成 17 年 3 月
- ③ 児童には、授業前にインタビュー（半構造化面接）を行う。その後、インタビューをした児童を中心に授業中に参与観察を行い、さらに、授業後、インタビューを行う。授業者については、授業後にインタビューを行う。したがって、本研究では、インタビューで得た情報と参与観察によって得た情報を対象として分析を進める。

### 6 分析焦点者の設定

授業参加者（児童 19 名・授業者）

#### <質問及び検討事項>

- ① この研究で一番知りたいことは何か？  
→抽象的なので、具体的にとらえる必要がある。
- ② 2 年生がどれだけ話せるか？質問が誘導的になってしまわないか？

→インタビューのみならず、フィールド観察もいれた方がよい。

③ 運動の意味とは何か？

→定義をしっかりとしなければいけない。まだまだ不十分なのでこれから検討が必要

\* エリクソンの理論の逆転的な発想。M-GTA によって明らかにすることができる可能性はあると考えられる。

<発表の機会を与えられて（感想）>

今回、発表の機会を頂き、本当によかったと思います。何度か研究会に参加させて頂き、看護・医療系の発表が多かったので、私のような教育学系の発表はいかかなものかと躊躇もしましたが、いろいろとたくさんの示唆を頂くことができました。そのような中で、発表を通して感じたことを3点述べさせていただきます。

まず、私の用語の曖昧さに気づかされました。日頃から誰にでもわかるような言葉を使おうと心がけてはいるつもりですが、抽象的かつ難解な言葉を多用していたように思います。しかも、経験的につかっているものが多く、明確な定義ができていなかったことに反省をしました。次回の発表では、用語を整理して発表したいと思います。

次に、面接対象者についての迷いが消えました。質問を頂いたように、2年生の面接による研究の妥当性が問われるのではないかと私自身考えておりました。しかし、御意見を頂く中で、フィールドワークとの併用でやっていけるのではないかという自信を持つこともできました。実は、半構造化面接が主流の M-GTA においてフィールドワークを利用することさえ迷っていましたが、方向性を示唆していただいたようにさえ感じます。

最後に、私自身が取り組んでいる研究が既存の学習評価概念ではとらえきれないものであり、学習観そのものを問うものでもあります。そのような中で、研究手法に迷い、悩んでいる中で出会った「M-GTA」という研究手法の可能性を検討の中から実感できたことを嬉しく思います。

データもかなり収集できてきたので、今後、分析を進めながら、さらに、データの収集も行っていきたいと思います。4月には論文としてまとめていきたいという気持ちもあります。それゆえ、3月12日はなんとしても発表したかったのですが、後期試験と重なってしまったのが残念でなりません。ある程度かたちになりましたら、皆さんにメール等で御意見を頂くかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

<参考文献>

鈴木直樹(2003) 体育授業における学習評価としてのコミュニケーション. 体育科教育学研究. 第19巻第2号. pp. 1-12.

## 【構想発表2】

重症心身障害児（者）の行動への看護師の関わりと反応理解のプロセス

日本赤十字豊田看護大学 市江和子

### I 本題

## 1. 研究テーマ

重症心身障害児（者）とは、児童福祉法第43条の4で、「重度の知的障害および重度の肢体不自由が重複している児童」のことをいう。重症心身障害児（者）施設は、「これらの児童を入所させ、これを保護するとともに、治療および日常生活の指導をすることを目的とする施設」である。

本研究に取り組む動機は、かつて施設に入所している重症心身障害児と接した中で、言語が聞き取れず意思の疎通が困難だった経験に基づく。一方、そのような児の反応を読み取り、他者に言語化し伝えることができる看護者の存在に驚いたことによる。とくに、コミュニケーションがとりにくい場面で、的確に意思をとらえることができていた場面が印象的であった。

これまで障害者のコミュニケーションに関する研究はさまざまになされてきたが、介助者側の係わり方や思いに焦点化した研究は少ないとされている（山下、2002）。重症心身障害児（者）は、自分の意図や要求を他者に伝達することや、他者からの働きかけを理解することができにくいため、「反応が乏しい」とみなされる傾向がある。しかし、実はさまざまな表現方法で感情や要求を伝えているといえる。そして、その表現や行動をとらえ援助する看護師の実践があると考えられる。

本研究では、重症心身障害児（者）施設に入所する障害児（者）に勤務する看護師の、障害児（者）への関わりから、障害児（者）の行動を理解する過程を明らかにする。

## 2. 現象特性

重症心身障害児（者）施設で勤務する看護職が、障害児（者）と関わりにおける反応を理解する相互作用プロセス。

## 3. M-GTA に適した研究であるか

この研究の知見は、看護者の視点から、行動理解のための相互作用について、実践現場に基づいたグランデッド・セオリーを導くことで、具体的な実践課題を提示することが可能と考える。

## 4. 対象と方法

本研究者が所在する東海地域において、（1）障害児（者）の入所施設を選択し、（2）施設長および看護部長に研究者が作成した「インタビュー調査ご協力お願い」（主旨説明とインタビュー内容、条件の説明書）を用い研究の主旨を説明し了解を得、（3）施設の責任者より、対象者を紹介していただき、（4）対象者に「インタビュー調査ご協力お願い」を用いて研究の主旨を説明し参加を依頼、（5）研究参加者の了解を得た後個人インタビューを行う（20人前後の看護師を予定している）、（6）謝礼は予定していない。

方法は、質的研究の手法を取り、看護師に半構造化面接を行う。インタビュー場所は、

各施設の個室、インタビュー時間は60～90分間、現象学的面接法を取り入れ、主に①日常の看護実践に関して大切に思うこと、②障害児（者）へ関わりの中で自分が変わったと思うこと、変わってきたと思うこと、③障害児（者）に対するケアでよかったと思える体験に関して語ってもらう。インタビューは、参加者のより深い思いや見解に焦点を当てるため、話の流れ方により、必ずしも①～③の順序では行わない。面接の内容は、参加者の了承を得た上で録音、逐語録（transcript verbatim）を作成し、Grounded Theory Approachの手法を参考にコード化、カテゴリー化そして分析を行う。

## 5. 分析テーマへの絞込み：

明らかにしたいプロセス：障害児（者）との関わりを通して、相手を理解していく過程。対象とした看護師の行動の変化に焦点を当てる。

### <質疑応答とコメント>

- ・ 対象者を看護職に限定するのかどうか、業務内容としては看護職、福祉職は同じではないか→  
重症心身障害児（者）施設においては、看護職、福祉職、保育職は医療業務を除きほとんど同じ仕事をしていると考えている。看護職がどのように障害児（者）の反応をとらえることができるのか、その過程を明らかにすることを目的とし、研究に取り組みたい。
- ・ 対象者の選択について、経験年数が影響するのではないか→  
経験年数が影響すると考えており、どの対象に対して調査を行うか検討中である。理解のプロセスを明らかにする場合、経験年数が長いと、記憶が不明確ではないかと考える。
- ・ 対象者は20名に限定するのにか→  
対象者は、およそ20名を予定しているが、限定しているわけではない。
- ・ 反応を理解するのは、個人の感性によるのではないか→  
看護者の感性がとても重要と思うが、感性という言葉でくることができないものを引き出したい。
- ・ 「テーマ」、「研究目的」、「分析テーマの絞込み」が一致していない→  
ご指摘のとおりと思うので、内容をさらに検討していきたい。

### <発表後の感想・今後の展望>

今回の研究会では発表の機会をいただき、大変感謝しております。木下先生はじめ、皆様からの貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございました。

現在、先行研究論文の収集、木下先生の著書を読んでいるところです。自分の研究領域をぜひ固めていきたいと思っております。今後とも、よろしくお願い致します。

.....

**【次回の研究会】**

日時： 第 30 回 2005 年 3 月 1 2 日(土) 午後 (13:30-18:00 を予定)

場所： 立教大学 (池袋キャンパス) の予定です。詳細は後日MLでお知らせします。

**【編集後記】**

- ・ 第 29 回の研究会の報告です。発表者、報告者のみなさん、ニューズレター用に原稿をまとめていただきありがとうございました。
- ・ 今年 1 年、みなさんにとってどんな年でしたでしょうか。暖冬のように今ひとつ季節感がありませんが、どうぞよいお年を。

(木下記)